

都市の周辺世界・横浜における「場所の記憶」を紡いで —伊勢佐木町・真金町・山手の遊郭・「カフェー」等をめぐって—

藤原 法子

1. はじめに

本稿は、横浜の関外を中心に展開した、遊廓や「カフェー」といった都市施設に注目し、それらに関わる人々の「記憶」や「生き方」を手がかりに、そこから浮かび上がってくる都市の周辺世界の「思想」を探ろうとするものである。

そもそも本稿で取り上げる都市の周辺世界とは何か。広田康生は、奥田道大が提示した、新たな都市コミュニティとしての「都市型エスニック・コミュニティ(=錯綜体都市・グラスルーツ版)」を象徴するものとしての「思想化される都市の周辺世界」を、『生き方』『移動』『歴史』『出来事』『エスニシティ』『サブカルチャー』『現在の周縁性』等々が錯綜し、幾重に重ねることによってその特徴が現れてくる現在の『都市コミュニティ』であるとし、それをまた「アーバン・コミュニティ」と呼び、現在のトランスナショナル時代の都市コミュニティとして定義する(広田 2019:66)。

そして、この「思想化される都市の周辺世界」を捉えていく際のいくつかの手がかりとして、『周縁』の場所には、『移動・エスニシティ』と『共生』する問題や施設・場所が、『痕跡』や『過去』の問題としてではなく、『現在』の問題として、そして、『言葉』としてではなく『出来事』として、あるいは『他者と自身の関係性』としての『体内化(incorporation)』と『取り込み』という問題として存在する」と述べる(広田 2019:69)。

そもそも都市の周辺世界への注目とは、都市や都市を生きる人々をどのように捉えるのか、という問題であるだろう。「中心的」な都市の捉え方や「中心的」な都市を生きる人々とは異なる都市や都市を生きる人々を通して、そうした人々によって作られる世界を捉えるなかから、改めて都市や都市を生きる人々について再考することであるだろう。そして、その際、その場所に関わるさまざまな「記憶」を手がかりとしながら、現在を読み解いていくこと。そこに流れる「思想」を掬いとっていき作業が必要なのではないだろうか。

本稿では、横浜という都市の周辺世界の一端を、横浜の周縁性を象徴する遊郭、「カフェー」などをめぐる「記憶」を、それらを紡ぐことで、都市の周辺世界のなかから横浜という都市の「記憶」がどのように作りだされているのか。そこを生きる人々がその場所をどのように生き抜いてきたのか。特に、開港場として「外」から入ってきた世界のなかでどのように自らの世

界を作り出し、どのように異質な他者と向き合ってきたのかについて、「記憶」を手がかりとしながら、都市の周辺世界の位相を探っていきたい。

2. 都市の周辺世界をどのように捉えるのか

2.1. 都市の周辺世界の「記憶」について

アライダ・アスマンは、その著書『想起の空間—文化的記憶の形態と変遷』のなかで、記憶を「住まわれた記憶」と「住まわれざる記憶」に分け、前者を何らかの担い手と結びついた記憶であり、後者は特定の担い手とは切り離されている記憶と述べている（Assmann 1999=2007:162）。そしてこれらの記憶の関係について、前者を「機能的記憶」、後者を「蓄積的記憶」として捉え、「蓄積的記憶」は「機能的記憶」の周りに存在し、それが入れ替え可能なものとして利用されることによって、記憶を再編成可能なものとして示している（Assmann 1999=2007:163-170）。

アスマンが述べるように、記憶が再編成可能なものであるとき、場所の記憶も、いくつかの可能性の中から選び取られたものとして語られ、描かれてきたといえるのではないだろうか。では、横浜という場所は、何を記憶として選び取ってきたのか。

横浜は、1858年の日米修好通商条約によって1958年に港が開かれ、開港場としてのスタートを切る。これが横浜という場所が選び取った表立って語られる記憶の土台となるものである。外国人居留地が形成されるなかで、「外国」と接する空間としてのさまざまな経験が記憶として選択されていく。そしてまた第二次世界大戦後の「占領」の経験も、横浜にとってすでに語られなくなっているが、現在まで続く都市横浜を形作ってきた経験であり、「記憶」である。

しかし本稿で取り上げる「記憶」は、遊廓やカフェや闇市などをめぐって展開した「記憶」である。もちろん横浜においてそれは、開港場としての、あるいはまた、「占領」からの復興を果たしていく、「外国」と接する空間としての、表立った「歴史」とその「記憶」とパラレルに存在するものでもある。ただしそれはそのまの「記憶」として表立って積極的に語られるものではないだろう。また表立って語られるとき、その多くはどこか後ろめたさや気まずさを伴っているのだが、後ろめたさや気まずさとしての「記憶」ではなく、それらの「記憶」やその断片を紡ぐことで見えてくるもの—大げさに言えばそれは、時代や社会の間にあって時代や社会を変えていくような、あるいはそこを乗り越えていくような生き方であり、異なるものとの向き合い方—である。そのとき、どのように自らの世界をその場所につくり出していったのか。それらをとおして、横浜という都市の周辺世界のその一端を探っていきたい。

2.2. 遊廓や「カフェー」という対象について

なぜ、遊廓や「カフェー」をめぐる「記憶」を取り上げるのか。

遊廓や「カフェー」についてはこれまでさまざまな研究がなされてきているが、ここでは現在の都市コミュニティを都市の周辺世界に照準したときに、これらの場がどのような意味を持っているのかについて考えてみたい。

2.2.1. 「見えにくい、隠された、捉えがたい」場

ジョルジュ・バタイユ (Georges Bataille) は、〈愛 (広義のエロス) の関係〉について、「私 - の - 外」へと開かれる経験であると述べている (湯浅 1997:26) が、それはまた私たちが自明とし、前提としている社会について問い直そうとすること—「(私の存在) の自明性」が根底から問い直されること—でもある (湯浅 1997:51)。

湯浅博雄は、バタイユの〈企図〉について『いまこの時』になにかをすること、操作し、活動することが、つねに『後に来るはずの時』になればその成果を手にしうる、ある物を所有できる、自分にとって有益なことになる、と〈期待〉してのみ実行される様式 (湯浅 1997:43) であると述べる。そこでは、「私」は、『わたしが区切り、言い表すことができるもの』、『主体であり、自己の意識である』私が『自分の対象』として捉え、了解するもの、そう信じられるもの (湯浅 1997:25) として対象を捉えるがゆえに、それらは、「〈同質的〉」であり、「他者」との間に〈共約しうるもの〉であり、〈共約可能性の意識〉が成り立つもの (湯浅 1997:25) として考えられる。互いが共約可能であることで成り立っているのが、社会であり、その『社会の同質性』を保つために最大の力となってきたのは、〈至高であるかのごとく信じられる審級〉である (湯浅 1997:19)。

この「審級」によって支えられる「同質性としての現実」は、常にその「審級」によって「私が明確に区切ることができず、言い表せない部分をつねに含んでいる現実、どうしても共約不可能な次元を内包している『異質性としての現実』」 (湯浅 1997:23) を切り捨てることで成り立ってきたのである。

この『擬い物の至高性』に幻惑されない共同性、「すなわち共約可能性およびその意識がいつも既に成り立つと前提にしている『共同性』ではない共同性、それとは異なる次元における共同性」 (湯浅 1997:26) は、『主体—の—外』の次元における共同性ということだ (湯浅 1997:26) と述べられている。それはまた、『この時』が『後に来る時』を予測してそこに到達しようとするのではなく、『この時』それ自体としてのみ価値づけられる部分は、まさにそういう見えにくい、隠された、捉えがたい領域 (湯浅 1997:48) であるとされる。本稿で対象とする遊廓や「カフェー」といった場、あるいはそこに関わる人々の世界は、ここで湯浅がバタイ

ユの共同性に関わって提示しているような「見えにくい、隠された、捉えがたい領域」であると同時に、「異質性としての現実」としてあるといえるのではないだろうか。それは「中心的な都市として見えているものとは異なるものであり、都市の周辺世界の一つを構成するものであるだろう。

2.2.2. 徹底的に生き尽くされる瞬間

こうした「時」をいかに捉えるのか。こうした領域をどこに見るのか。

湯浅は、バタイユが自明の共約可能性を前提とする共同性を問い直すときに注目する「時」について、「ひとが現在を特別の中心とする時間性（クロノス）という枠組のなかで生き」、「そんな時間概念を疑っていない」（湯浅 1997:71）ことが、『私は現在として存在している』、『私は現在において自分自身に現前している』と信じている」（湯浅 1997:71）ことを可能にするのだと述べる。そして、この信念が強烈に問い直され、疑問視されるのは、『私を（私の手にするすべての力やエネルギーを）激しく濫費する瞬間』（湯浅 1997:74）であるとする。

また「独特な時間には、つまり私たちが日常的に生きている時間—その『持続』が、時計によって計ることのできる『量としての時間』、『現在が中心となって次々と継起していく時間』—が途切れ、宙吊りになってしまい、ただ濃密で強烈な『質としてのみ』内的に生きられる時間には、『私は主体として定まっている』という確信は、極度に危うくなる」（湯浅 1997:74）と述べる。そしてそこでは、「私はもう、自分がいま生きている（はずの）出来事を、ほんとうに『現在として生きているのかどうか』確定できない。私は現在において〈私自身へと現前している〉とは決定できない。いわば『現在』は、自己自身をかわしてしまう。『自己同一性の定まった現在』にどうしてもなりえない。こういう時間性は通常の時間（クロノス）ではない。『過去は過ぎ去った現在であり、未来に来るはずの現在である』というように、『現在が特別の中心になり、次々に継起していく流れ』と思われている時間ではない。現在のない時間、現在が底なしに沈み込んでいく時間、現在における（自己へと現前する）同一性がありえない時間」（湯浅 1997:76）となり、「もう『後に来るはずの時』への期待は働かない。だからいままさに生きる『この時』は、『将来の時』を予測して『そこに到達しよう』、『完了しよう』とすることを通じてのみ『意味を持つ』ような〈企図という様式〉から外れている。『この時』は、まさにそこでは（自分が手にする）あらゆるエネルギーの自由な横溢が起こり、そうした力の過剰がなんら留保する気づかいなしに消尽される、この上なく強まった瞬間となる。言い換えれば、この瞬間は、ただそれ自体として価値を持つ仕方徹底的に生き尽くされる」（湯浅 1997:79）とする。

都市の周辺世界として捉えるべき「時」とは、こうした日常の時間、クロノスの時間とは異

なる、「完了することが期待される」そうした時とは異なる、まさに「この時」としてのみ存在する時であるだろう。そうした「時」は、常に何らかの変化のなかに紛れ込んでいるのではないだろうか。本稿では、その第一の「時」として開港場としての展開期を、もう一つの「時」として横浜の占領期を取りあげる。

2.2.3. 「内奥的な生」の場として

バタイユの述べる「内奥的な生」について湯浅は、「内奥の生の動きとは、人間が〈対象〉に密着して働きかけることで一すなわち〈労働する〉こと、さらには〈理性〉的に操作し、生産活動を実行すること、またその生産活動に規定された様式で交換を行い、消費し、享受することで一、生存を維持し、生活を富ませるという〈必要性〉 *bosoins* に応える活動を営むことの彼方における（あるいはそれに至る手前における）人間の生」（湯浅 1997:164）であり、「人間の主観的＝主體的な生である—〈否定性への作業〉へと帰趨することのない生、なにかあるものを〈否定する〉仕方では〈対象〉化し、作り変える活動とは異なる生である—」（湯浅 1997:165）が、ただし「ここでバタイユが言う主観＝主体は、通常の意味での（そして伝統的に哲学が論じてきた）〈主観＝主体〉とは大きく違」、い、「切り離された、非連続な存在—〈個〉的存在—として定立された主体ではない。〈死の意識〉を内包し、判明に〈自己〉を意識する主体、行動する〈無〉となって、所与を〈否定する作用〉を実践する主体のことではない。そうではなく、むしろそんな〈個人的な私の統一性〉としての主体性＝主観性がなんらかの仕方では破れる際の、その主体 - の - 外が問題となる」（湯浅 1997:165-166）と述べる。

この「個人的な〈私〉の同一性と整合性にほかならない〈主観性〉の堅固な骨組が不意に脱臼し、壊れる瞬間に、思いもよらぬかたちで出現する〈深い主観性〉」（湯浅 1997:166）の露出する場として、「聖なるもの」を挙げ、また「愛〈広義のエロス〉」の関係や場において、〈私〉の同一性が破れた裂け目で、『私が生きる』のではない出来事としても経験される」（湯浅 1997:299）と述べている。

本稿で対象とする遊郭や「カフェー」といった場、そしてそれらに関わるそれぞれの時期は、まさにその時々において「この時」が出現するその領域であり、そこでは従来のあるいは通常の秩序が何かしら綻び、あるいは壊れることで成立していたと考えることができるのではないだろうか。そのような場が都市の周辺世界であり、そうした場をどのように生き、乗り越えていくのかを探っていくことが本稿の目的である。

3. 横浜における周辺世界の「記憶」とその「思想」

これらの出来事は、出来事が起きていたときは誰もが知っていた、あるいは直接身を置いていた現実であるが、これらは横浜という場所の「中心的な記憶」ではない。しかしまた他方で、横浜という場所を作ってきた「記憶」である。都市の周辺世界を生きる人々のさまざまな「生き方」の「記憶」から、再編成可能な横浜という都市の「記憶」そして、周辺として存在してきたもうひとつの横浜という場所が、現在まで異質な他者と向き合ってきた向き合い方を捉えることができるのではないだろうか。そこから現在の都市の周辺世界の姿を明らかにすることができるのではないだろうか。

3.1. 開港場としての横浜の「記憶」

3.1.1. 遊廓にみる「場所形成」

江戸時代末期、1958年の日米修好通商条約により横浜は開港場となる。ここには、「一攫千金を狙う商人や、幕府の誘致によって出店をした江戸の承認による店舗が立地」し、またすでに中国との貿易で利益を上げていた外国商社など、「多くの外国商社が回轉し、開港場の市街地化」が進行していく（斎藤・市川・山下 201:59）。

その条約締結の翌年、現在の横浜公園のある場所に、神奈川宿で旅籠を営んでいた鈴木屋善次郎と同様に品川宿で旅籠を営んでいた岩槻屋佐吉らによって、土地の埋立・開拓が行われ、遊廓地が作られる（石井・東海林編 1973:3-5）。この場所は、「関内」と呼ばれる場所の一角であるが、海に向かってみたとき、日本大通りの右側が「山下居留地」と呼ばれた外国人居留地である。そしてこの日本大通りを境に左側は日本人が居住、店を出す地域となっていた。

この遊廓地の届け出においては、「安政六年五月、神奈川宿飯売（当時、宿場遊女の称は、所により異なりたり。東海道筋は飯売女といい、中山道は飯盛売女、浦賀に手は洗濯売女といえり）旅籠渡世鈴木屋善次郎、品川宿同渡世岩槻屋佐吉の二人が、横浜へ遊廓取立のことを神奈川奉行へ出願しました。奉行所では、なるほど港内に遊廓がなくば、外国人等が宿々へいつて遊興する様にもなるべく、さよの事あつては自然、役人の不取締ともなるべしと、詮議の上、直ちに開営を許可になりましたが、なお、役人より、当今は市中の商家すら外国人の見て恥ずかしからぬよう、せいぜい家屋の建築を見事にいたすべしと申付てあるによつて、廓楼のごときは、いつそう宏壮なる建物にせねばならぬ」（石井・東海林編 1973:5）と、外国人が他に行つて遊興することを防ぐことを目的に、また外国人に向けて建物が立派であるようにとの達しのもとに行われている。

またこの遊廓地の目的の一つとして、「外国」に向けたものであることから、「洋妾」「らしゃ

めんと呼ばれた外国人相手の女性たちも集められている。「外国人」という当時としては、見たこともないような海外の人々と相對することへの抵抗と同時に、「外国人」客の羽振りの良さや「遊び方」への好感をともなった驚きなど、異なるものと向き合う場としても遊廓地は展開する。『横浜どんたく』では、中国人の遊廓での遊びについて、お大尽な様子に驚くとともに、その金払いの良さが遊廓の女性にとって好まれていたことが書かれている（石井・東海林編 1973:50）。横浜において遊廓地は、まずは「外国」に向けて作られ、そして日本と外国の間に位置し、その間を繋ぐものとして存在することになる。

しかし、この最初の遊廓（港崎遊廓）は 1866 年に火事により焼失し、翌 1867 年に現在の羽衣町に移転している。これが吉原遊廓である。『横浜どんたく』によれば、この港崎遊廓から吉原遊廓への移転が「関外の開けはじめ」であると書かれている（石井・東海林 1973:12）。この遊廓のまわりには、「羽衣町のところに遊廓があったころ、羽衣町に米田という会席があつて、太田町に佐野茂、真砂町のところに東京深川の名高い松本が店を出し、東京八百善の料理人で八百藤というのがその名で、常磐町に店を出す。今の八百政の前の嘉以古が、太田町に天ぷら屋をやっていたころです。舞いあいといつてもわずか二軒で、相生町に今村という待合兼貸席があつて、今の豊国橋の向う河岸に、相模屋という三階造りの待合がありました」と、富貴楼といった料理屋や東京の有名店の料理人が出した店などがつくられ、また芸者屋や貸座敷、待合が集まってきていた（石井・東海林 1973:47-48）。外国人や日本人でにぎわう「関内」の外側の地域に、さまざまな店や人手をもたらず契機が遊廓によって担われてもいた。

しかし 1872 年には埋立でできた高島町へ再び移転するが、商業地としての賑わいをもたらすものとして、関外の現長者町辺りに土地を持って行った地権者らによって遊廓の関外への再誘致の動きが起こるが、最終的には真金町・永楽町への移転が行われ、この場所が横浜の遊廓地として戦後まで続いていくことになる（石井・東海林 1973:12-15）。ただし、高島町から真金町・永楽町（永真遊廓）への移転にあたっては、仮宅として長者町に一時遊廓が置かれている。このことが、「伊勢佐木町のひらける動機」となると『横浜どんたく』のなかでは紹介されている（石井・東海林編 1973:15）。わずかな期間であっても、遊廓は経済的に豊かな人々が集まる場であり、その周囲には関連する様々な施設も集まってくる場であった。

横浜には開港場となるまでなかった遊廓は、開港にともなう外国人の増加を背景に生じると想定された問題の囲い込みの手段の一つとしてつくられていくのではあるが、港崎遊廓から吉原遊廓、高島遊廓、そして永真遊廓と、その遊廓の移動、移転は、それぞれの場所に新しいまちをつくっていくその契機となり、また契機として捉えられている。それは、一つには、全く何もないところを埋立することで、新たに場所を生み出していくということであり、二つ目としては、生み出した地に、新たな世界を作り出していくということであった。港崎遊廓をつくつ

た鈴木屋も岩槻屋もこの開港場として開けつつあった横浜という場所に、自らの新たな場所を作り出した者たちの一人であり、他の遊廓の遊女抱えについての記述からもそれぞれの人びとが横浜という場所にこれまでとは違う、新しさへの可能性を求めて集まってきた人々であることがわかる。こうした遊廓地を作っていた人々と同様に、その周りの料理屋などにしても他の地から新しく入ってきて自らの商売の場所を形成していく好機を横浜という場所に見出していた。

3.1.2. 「周辺世界」における間をつなぐという「生き方」

遊廓に注目するとき、横浜の周辺世界の一つの特徴として、外国と日本、表と裏といった異なるものをつなぐ役割をもった場所形成を見ることができるのではないだろうか。そうした場所での人々の生き方の一つとして、ここでは料理屋兼旅館として、明治期の待合政治の場として名を馳せた横浜の料理屋である富貴楼の女将のお倉に注目してみたい。

この富貴楼および女将のお倉について書かれたものはいくつかあるが、本稿では小説ではあるが鳥居民の『横浜富貴楼 お倉』の記述を使いながら、横浜の周辺世界における富貴楼およびそこでのお倉という女性の間をつなぐ生き方を探してみたい。

富貴楼は、明治四年（1871）に横浜の駒形町（現相生町5丁目）に、女将であるお倉によって開かれた（鳥居 1997:42）。江刺昭子・史の会編の『時代を拓いた女たち第Ⅱ集』には、「明治の政治家伊藤博文や井上馨、陸奥宗光らと親しく、『天下の糸平』と呼ばれた豪商田中平八の出資で料亭を経営した富貴楼お倉は、その美貌と才気で政商のあいだでただならぬ存在であった。今でいうフィクサー。『女社会の大元老』（『お鯉物語』）ともいわれた」と書かれている（江刺・史の会編 2011:182）。鳥居民は『横浜富貴楼 お倉』のなかで、明治の実業家の高橋義雄の回顧録『筭のあと』を引用しているが、そこには「…此女将中の大御所とも謂うべきは、明治初期より中期まで、大いに其異彩を放った横浜富貴楼のお倉であろう。彼の女の一代記は事長ければ之を省き、其全盛時代に於て、伊藤、井上、大隈、山県等の大官を手玉に取り、政府の属僚役人等をして、其鼻息を窺わしめた辣腕は、時代が時代だけに、後人の企て及ばざる所であり、又彼の女が横浜に在りながら、東京の各花柳国をも属国扱いにして、所謂飛ぶ鳥を落とした将軍ぶりは、如何にも豪勢なものであった」（鳥居 1997:13）と書かれている。ここから見る限りではあるが、明治という新しい時代のなかで、したたかにそしてしなやかに生き抜く一人の女性の姿が垣間見える。

このお倉は、東京谷中の生まれである。横浜に富貴楼を出すまでの彼女は、新宿や品川、吉原の引手茶屋につとめ、さらには大阪にわたり横浜に着いたあとも芸妓としてつとめ、その後自ら芸者置屋を開いている（鳥居 1997）。さまざまな事情からお倉は、遊女、芸妓として働く

ことになるのだが、常にそこには現状を自らの才覚で乗り越えていく姿勢がみられる。たとえば、遊女奉公として働くことになるが、身受けしてもらい早々に店を出てくる算段をする。あるいは遊女時代の仲間を頼って、芸妓をし、芸者置屋を開き、そのなかで知り合った人々の支援を受けながら、資金をつくり料理屋を買い、自らの店として大きくしていった。鳥居は、「横浜でなら裸一環でも食べていけました。埋め立ての仕事がありました。日本中で埋立てなどやっているのは横浜だけでした。このおかげで横浜にきたお俊夫婦だって生活ができたわけなんです。ええ、私たち夫婦も一息つくことができたのです」と、当時の横浜の活気ある状況を大阪から横浜にやってきた理由としてお倉に語らせている（鳥居 1997:65）。

お倉の店も、最初の店は火事で消失しているが、この当時の遊廓もそうであったように、火事とともに新しい場所へと移っていく。火事という大きな損失を生じさせるとともに、同時に遷移によって、新しい場所がさらにひらけていく、新たな場所を形成していくという横浜という場所の姿が見えてくる。それはお倉に見られるように、自らの新たな場所を作り出し、こうとする生き方でもある。

お倉にとって自らの新たな場所を作り出し、さらなる上を目指す一つの方法が、客としてやってきた当時の政治の中心にいた人々の間において「フィクサー」を担うということであった。新宿で遊女をしていたときの、あるいは横浜で芸妓をしていたときの、置屋をしていたときの、さまざまな伝手や自らの才覚のもと、政治の中心にいた人々を繋ぐ役割を果たしている。そのことが、鳥居民が、「毎朝、県庁から使いが富貴楼に来ます。警官も来ます。どちらも、今日は東京からだれが来るのかを尋ねます。内務省や外務省から富貴楼に電報が届き、明日、だれそれが行くと伝えてくれるのです。ロンドンやハワイ、ワシントン、清国に行く役人は、この時代は年間百人足らずですが、かならず富貴楼に知らせを入れます。出帆の日まで富貴楼に宿泊して、床屋を呼んでもらい、洋服を新調し、靴をあつらえます。鞆を買い、土産物を揃え、洋行前の写真を撮ります。お倉自身が一緒に行くか、女中が連れてまわります」（鳥居 1997: 104）と富貴楼の様子を描いたように、単なる料理茶屋ではない結節点として役割を担った都市施設としての富貴楼であり、そうした場を作り出したお倉の「生き方」でもあるだろう。

3.2. 占領期の横浜における「場所形成」と「生き方」

赤塚行雄はその自分史の一部とも言える著書『港のみえる丘物語 マダム篠田の家』のなかで、「占領史となるとかならず引用される有末精三や鈴木九万や岡崎勝男といった人々の側からの発言ではなく、鎌田銚一や西田喜七らの証言を中心にして、『第一次占領地の少年の実感を大切にしながら、敗戦直後の横浜の様子を再構成』（赤塚 1989: 2）することをとおして、歴史として記述されえない個人の経験、「記憶」を紡いだところに立ち現れてくる横浜の周辺世界を

垣間見せる。無論そこで描かれている世界は、「本書に登場する人々の大半は実名であるが、一部ご迷惑がかからないように仮名にし、その周辺のみ、若干、フィクショナルに構成した」（赤塚 1989: 295）と述べられているように、それは彼自身の「体験」そのままでも「記憶」そのままでもないが、本稿で取り上げる「場所の記憶」として、あるいはその場所に埋め込まれた記憶として、占領期というある瞬間として語られるその場所の、そこに展開する都市的世界の意味づけとしてある。

3.2.1. 占領期を生き抜くいくつもの「生き方」

ここでは、赤塚行雄の『港の見える丘物語 マダム篠田の家』の記述を引用しながら、第二次世界大戦後の占領期の横浜とそこを生きた女性たちへの「記憶」をたどっていく。

赤塚はその著書において、戦後の自らの体験のなかに登場した何人かの女性たちに注目しながら戦後の日本社会について語っているのだが、その女性たちとは一般的には「パンパン」と社会から見なされた女性たちである。代表するのが赤塚が「マダム篠田」と名付けた人物である。

「マダム篠田は、当時のいわゆるパンパンガールの一人かという、かならずしも当たっていない。パンパンとは占領軍の兵士に行きあたりばつたりと肉体を売って金を得ていた女たちのことである。パンパンの中の一種であるオンリーさんだろーといえ、それに近くはあるが、あらためて考えてみると、やはりちょっと違う。オンリーは、いわば妾で、その男一人にきめて生活の面倒をみてもらう日陰の女のこと。自分の生活を考えるだけで精いっぱい世間のことなど考えもしない。むしろ世間に背を向けて生活している。彼女は、それほど受け身ではない。そこで一種のクルチザンヌとしてとらえるのはどうか。ふつうクルチザンヌは、高級娼婦と訳される。けれども、フランスでルイ・フィリップのころに登場し、その後、ヨーロッパをはじめあちこちの都会に目立ち始めるクルチザンヌと呼ばれる女たちは特別の存在だった」

（赤塚 1989: 14・15）と、彼の「記憶」によって立ち上がってくるいわゆる「娼婦」として一括りにされてしまう一女性の、「娼婦」という括りでは説明できない「生き方」を語っている。

赤塚自身が居住していたのは、横浜の神奈川区栗田谷辺りであるが、その家のすぐ裏が「パンパン」の宿となっていた。そうした体験から赤塚は、「私の場合は、パンパン宿の隣で生活しているから、実態がどういうものかよく知っている。だから、『どうしても生活のしようがなく転落した』などという紋切り型ではすまされない。パンパンガールたちが街に溢れ出すのはRAAが解散を命ぜられてから以後のことで、たしかに『食うに困って…』という傾向がなかったわけではない。けれども、積極的に占領軍の男性に興味をもって近づいていく女たちも少なくなかった。そこには、『もう時代は変わったのだ』という一種の解放感、あるいは、『これ

までのみじめな生活など清算してしまおう』という決心、新しい生き方を求める心の動きなどが隠されていたと思う」(赤塚 1997:140)と、占領期を生き抜く女性たちについて語っている。

同様なまなざしでとらえられた女性たちとして、「戦争花嫁」と呼ばれ、占領兵と結婚し、海を渡っていった人々がいる。「日本よ左様なら ハズに付添われ 戦争花嫁 90名が渡米」という昭和 27 年 (1952 年) 3 月 8 日の『神奈川新聞』の記事は、『『占領』のが街から消えゆくころ、国際ロマンスに花を咲かせた戦争花嫁九十名が、きのう七日午後四時横浜を出講する軍用船で、夫君の国アメリカに旅立った。カーキー色の軍服姿の背の君に付添われた彼女たちの嫁入り姿は、派手なアメリカンスタイル。一行のうちにはすでにベビーさんをつれた娘さんも多く、中には三人の子供連れもいた。花婿さんはほとんど下士官級。折りから降りそぐ淡雪の棧橋には、カラカサや手提げ鞆をかゝえた家族の群れが、五色のテープに肉親の最後の情をかよわせて別れを告げていた」(横浜市・横浜の空襲を記録する会 1975: 530-531)との記載がある。また「まぶたに花嫁衣しょう 国境超え結びのサイン 毎日忙しい中区長 昭和 22 年 7 月 16 日付けの『毎日新聞』。「“東京ロマンス”を地で行くような国境を超えてはなやかに実を結ぶ国際結婚をはじめ、外人同士の結婚も日本の一区長さんのサインが無いと法律的には成立しないというので、今日本一いそがしい出雲の神様ならぬ区長さんが毎日セツセと鼻の頭に汗をかきながらお芽出度い結婚届に署名している——」(横浜市・横浜の空襲を記録する会 1975: 367-368)と、いずれも華々しく彼女たちを扱っているのだが、必ずしも彼女たちは素直に祝福されて海外へ渡っていったわけではない。そのことについて、安富成良/スタウト・梅津和子の『アメリカに渡った戦争花嫁—日米国際結婚パイオニアの記録』では、著者の一人であるスタウト・梅津氏は自らの「戦争花嫁」としての実際について、「占領兵と親密な関係にあった女性」という一括りにされたイメージとは異なる、新しい時代を生き抜いていこうとする生き方を提示している。

そしてこの著書で取り上げる「マダム篠田」についても、赤塚は、「当時の社会概念からすれば、マダム篠田だって、オンリーという名のパンパンだった。アメリカ兵と付き合っていたら、そうでなくともパンパンといわれた」(赤塚 1997:245)と述べている。

しかし、赤塚はこうした女性たちに、蔑みの眼を向けているわけでも、また憐れんでいるわけでもない。「私たちの戦後民主主義というものは、ひたすら生きようとする生命エネルギーを土壌として根づいた。だから、戦後民主主義は、闇屋の価値観と無縁ではない。国家が面倒をみてくれないならば、ヤミであれ何であれ自分なりの才覚で腹をみたくして生きて行かねばならないというわけだ」(赤塚 1997:45)と述べる。そうした占領期において、人々が何が何でも生き抜いていこうとするなか、「戦後女がつよくなったというのは、男たちがタテマエに固執して動けなかったとき、女たちは、なりふりかまわず、どんどんホンネを追求したからでなかった

ろうか」(赤塚 1997:46)と、女性たちの生き方に注目する。それを代表していた一人が、赤塚がその少年時代にすれ違った「マダム篠田」である。

赤塚は、「マダム篠田」について、「横須賀の高橋美子のような『女丈夫』タイプの実業家ではなかった。彼女は女の魅力を売り物にして、占領軍の高級将校たちとつき合い、日本の男たちが自信を失った時代に一種の水先案内人のような役割を果たした」(赤塚 1997:16)と書いている。

こうした占領軍との関係は、「パンパン」と呼ばれた女性たちと占領軍との関係というよりも、当時の日本人と占領軍との関係であったと赤塚は述べている。赤塚は、当時生まれた新語の一つとして「スキヤパニーズ」という言葉を紹介しているのだが、それは『時の権力者』にゴマをすり、私腹を肥やそうとするジャパニーズ」の事であり、この言葉は自虐的に使われることが少なくなかったと述べ、当時の日本人誰もが『スキヤパニーズ』でなければやって行けない時代だったと書いている(赤塚 1997:17)。そして、「戦後の日本を支配していたのはアメリカ軍であり、日本の政・官界はもちろんのこと、民間人に至るまで総司令部の顔色をうかがって生きる時代だった。そうした中で、政府要人たちは、占領軍高官のご機嫌をとりむすぶべく、さかんにパーティを催し、『占領下“鹿鳴館”時代』などと呼ばれるような接待外交に励んだのも、時代のしからしめるところであった」(赤塚 1997:18)と書いている。

赤塚は、「マダム篠田は、第八軍の高級将校たちと接触するチャンスをつかんで、内山知事を背後から援助し、食糧放出を懇願している。これが日本での占領軍食糧物資放出の第一号となった」(赤塚 1989:55)と第2節で述べたようにクルチザンヌとしてのマダム篠田の一端を示している。こうした状況は彼女だけが行っていたのではなく、「第一次占領地区には、マダム篠田ほどではないとしても似たような女性たちが結構目立っていたのである」(赤塚 1989:56)と、1945年の10月にいち早く鶴見区潮田町に占領軍専用のダンスホール「ツルミ・サロン」をつくった森井カネをあげている(赤塚 1989:56)。そして「あの時代をなんとか生きのびてこれたのは、母親たち、あるいは姉たちのお陰なのである」(赤塚 1989:55)と食糧の買い出しに出掛けて行って、何とか食糧を手に入れてきた女性たちについて述べる。

赤塚が取り上げた女性たちは、従来の社会のありようが大きく変わらざるを得なくなった時、それはこれまでの秩序ではうまく機能しなくなった社会の中で、従来の枠組みを柔軟にこえていった人々の生き方を映し出しているといえるのではないだろうか。都市の周辺世界という「見えにくい、隠された、捉えがたい」ものとして見えてくる都市を生きる人々のいくつもの生き方の可能性としてみることができるのではないだろうか。

4. 横浜のもうひとつの「場所の記憶」から見える都市の周辺世界

港崎遊廓から始まった横浜の遊廓の最終地点となった永真遊廓は、空襲による大規模な被害を受け、戦後横浜の慰安施設の設置においては、大丸谷のチャブ屋や日本橋の芸妓屋などとともに共同経営という体裁をとっていた。しかし、国の要請により設置されながら、進駐軍による廃止の命令のもと「遊廓」としての体裁はとることができなくなり、いわゆる戦後の赤線の区域の一つとなっていく。

そして1956年に「売春防止法」が国会で成立し、公布されこととなったが、藤目ゆきは、当時の社会党の岩内善作および高原浅市による反対運動、赤線の女性たちの労働組合結成運動について提示しながら、「売春防止法」が、そもそも赤線の女性たちを取り締まる法律として成立した述べている（藤目 1997:401）。「売春防止法」においては、赤線の女性たちが一方的に犯罪者化されるのに対して、労働組合結成の呼びかけのもと、1956年1月に東京都内で、3月には全国規模での従業員組合の連合が結成されている（藤目 1997:401）。しかし横浜においてこうした動きが大きくなったわけではない。

現在、かつて永真遊廓であった場所は、ほとんどその跡を残さないほどに、いくつものマンションが立ち並ぶ住宅地へと変わってしまっている。しかし現在、この場所は国境を越えて移動してきた人々も含め多様な人々が暮らす場所でもある。この場所における、従来のあるいは通常の秩序が何かしら綻び、あるいは壊れたそのなかを乗り越えていく生き方、その可能性は、どのように現在とつながっているのだろうか。

上記で見てきた人々の生き方は、いくつもの生き方の可能性である。

必然としてではなく、偶々という何らかの偶然として、「この時」が出現するその場において、従来のあるいは通常の秩序が何かしら綻び、あるいは壊れたその場を人々はどのように生き、乗り越え、自らの可能性をつかみ取ろうとしていたのか。そこにどのような自らの生きる場を作り出していったのか。そこにどのような都市の周辺世界を生きる「思想」をみることができているのか。「この時」が出現する場における「記憶」を手がかりとしながら、さらに探っていきたい。

<文献リスト>

- 赤塚行雄, 1989, 『港の見える丘物語 マダム篠田の家—YOKOHAMA1945-50』第三文明社。
Assmann, Aleida, 1999, *Erinnerungsräume. Formen und Wandlungen des kulturellen Gedächtnisses*. München: C.H. Beck. (=2007, 安川晴基訳『想起の空間—文化的記憶の形態と変遷』水声社.)

- Assmann, Aleida, 2016, *Das Neue Unbehagen An Der Erinnerungskultur (Eine Intervention 2nd ed.)*, Verlag: C.H. Beck. (=2019, 安川晴基訳『想起の文化—忘却から対話へ』岩波書店)
- 茶園敏美, 2018, 『もうひとつの占領—セックスというコンタクト・ゾーンから』インパクト出版会.
- 茶園敏美, 2014, 『パンパンとは誰なのか—キャッチという占領期の性暴力と GI との親密性』インパクト出版会.
- 江刺昭子・史の会, 2011, 『時代を拓いた女たち 第Ⅱ集 かながわの 111 人』神奈川新聞社.
- 藤目ゆき, 1999, 『性の歴史学—公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』不二出版.
- 服部一馬・斎藤秀夫, 1983, 『占領の傷跡—第二次大戦と横浜』有隣堂.
- 樋口いく子, 2009, 『ハマの風 富貴楼お倉物語』幻冬舎ルネッサンス.
- 広田康生, 2019, 「『都市の周辺世界』における『主体』『哲学』『過去・記憶』—エスノグラフィ的方法と『脱構築的实践』—」『専修大学人文科学研究所月報』第 301 号, 専修大学人文科学研究所. 59-74.
- 石井光太郎・東海林静男編, 1973, 『横浜どんたく』下巻 有隣堂.
- 逆井聡人, 2018, 『〈焼け跡〉の戦後空間論』青弓社.
- 竹田青嗣, 1998, 『竹田青嗣コレクション4 現代社会と「超越」』海鳥社.
- 鳥居民, 1997, 『横浜富貴楼 お倉:明治の政治を動かした女』草思社.
- 安富成良・スタウト・梅津和子, 2005, 『アメリカに渡った戦争花嫁』明石書店.
- 横浜市総務局市史編集室編, 1993, 『横浜市史Ⅱ 第一巻 (上)』横浜市.
- 横浜市総務局市史編集室編, 1996, 『横浜市史Ⅱ 第一巻 (下)』横浜市.
- 横浜市編, 1973, 『横浜市史稿 風俗篇』
- 横浜市・横浜の空襲を記録する会編, 1975, 『横浜の空襲と戦災 6—世相編—』横浜の空襲を記録する会.
- 湯浅博雄, 1997, 『現代思想の冒険者たち 11 バタイユ—消尽』講談社.